



Title	私についての言明における自己意識と指示 : アンス コム の洞察と誤り
Author(s)	三富, 雄介
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79336
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

私についての言明における自己意識と指示

—アンスコムの洞察と誤り—

哲学哲学史 博士前期課程 1 年

三富 雄介

はじめに

語「私」は、それを発話している人物を指示する。したがって、例えば、「私は立っている」と S が発話した場合には、その言明が真であるための条件は「S は立っている」という言明が真であるための条件と等しい。

では、私についての言明は、語「私」の代わりに固有名が用いられているような言明とまったく同じだけの役割しかもたないのだろうか。そうではない、とイギリスの哲学者エリザベス・アンスコム (1919-2001) は考える。

第一に、語「私」は私の状態についての、直接的な把握を示し、その経験に自己意識が伴っていることを表すという独特な役割がある。第二に、アンスコムによれば、語「私」の使用において、誤った対象把握の可能性はなく、語「私」は何も指示しない。

本発表では、アンスコムの第一の主張については問題がないと考える。その上で、ジョン・ペリー (1943-) を参照しつつ、アンスコムの言う「自己意識」を行為や反応の特別な理由づけという観点から拡張した。他方、アンスコムの第二の主張については問題を指摘し、これを退ける。

1. アンスコムの議論

アンスコムによれば、語「私」はほかの指示的な語とは異なる特徴をもつ。第一の特徴は、それが自己意識を表現しているということである。アンスコムによれば、語「私」の機能は、各人がその人自身を指すために使われる記号であり、またすべての使用者たちに共有されている記号でもある (この機能だけをもつ記号を「A」とする)、という点に尽きない¹。

われわれは「私は立っている」と発話するとき、自分がどういう状態なのかについて、何かを観察したり報告を受けたりせずに、発話する。それに対し、「A」の場合には、自分自身であるような人物の状態を観察し、「A は立っている」と発話する。アンスコムによれば、「私は立っている」という言明においては、対象の行為、出来事、状

¹ Anscombe (1974/1981), pp. 24-26. なお内容に差し障りのない範囲で表現を変えている。

態についての「無媒介の把握 (unmediated conceptions)」が表現されている²。他方、「A」の場合には、誰がどういう状態であるのかについて観察や報告を必要とする。こちらは「媒介された把握」とでも言えよう。

アンスコムが述べたような自己意識は、それがあってもなくても他人からそれと気づかれないような、私秘的なものではない。アンスコムはジェイムズが述べたとして次の小咄を引用している。

私たちは相乗り馬車に乗っていた。突然、ドアが開いて、[……]ボールディが道路に落ちた。私たちが彼を引き上げると、彼は「誰か落ちたのか？」とか「誰が落ちたんだ？」と言った[……]。彼はボールディが落ちたと聞いて言った。「ボールディが落ちた？　かわいそうなボールディ！」³

ボールディは、誰が落ちたか尋ねることによって彼自身が落ちたことについての媒介された把握には成功したのだが、無媒介の把握には失敗しているのである。

語「私」がもつ第二の特徴は、語「私」の使用においては誤った対象把握の可能性がないということである⁴。ほかの指示的な語の場合では、Xを指示していたつもりが間違ってYを指示しているとか、あるいはそもそも指示対象など存在しないということがありうる。それに対し、例えば「私は立っている」という言明では、私はほかならぬ立っている私自身のことを言っており、これは確実である。アンスコムはこの事実を説明するために、語「私」は何も指示しないと考えた。

2. 自己意識と行為の理由づけ

アンスコムはそれとして言及していないが、引用したボールディの反応にはもう一つおかしいところがある。彼は彼自身が落ちたことをまるで他人事のように扱っている。「私が馬車から落ちた」という知識は「ある人 x が馬車から落ちた」という知識とは異なる行為や反応は引き起こすはずである。

私についての言明が、語「私」を含まないような言明と事実としては同じ知識を提供しているにもかかわらず、異なる行為の理由づけを与えるということを示す別の例をペリーが述べているから、以下に引用しよう。

あるとき私はスーパーの床に伸びる砂糖の線を追って、背の高いカウンターの片側の通路でカートを押し、また反対側を戻りしていた。破れた袋をもった買い物客を見つけて、床を汚していると教えたかったのだ。カウンターを一周するご

² Ibid., p. 34.

³ Ibid., p. 36.

⁴ Ibid., pp. 23-29.

とに砂糖の線は厚くなっていくのに、追いつくことはできそうにない。そしてとうとう気がついた。私が私の追いつこうとしていた買い物客だったのだ。

破れた袋をもった買い物客が床を汚していると私は最初信じていた。それは正しかった。しかし私が床を汚していると私は信じていなかった。それは後から信じるようになったことだ。そしてそのことを信じるようになったとき、私は砂糖の線を追ってぐるぐる回るのをやめ、自分のカートの砂糖を配置しなおした。⁵

したがって、私についての言明における語「私」をそれと外延を同じくするほかの語句と置き換えて得られるような言明に、私についての言明は還元できない。私についての言明のあるクラスは、少なくとも次の二点で重要な情報を表示している⁶。

(1) 私についてのある言明「私はFである」は、その言明中の主語「私」の外延であるような人物SがFであるとき、そのときに限り真である。いまSが「私はFである」と発話したとすると、その言明中の主語「私」は、SがFであることのSによる無媒介の把握を表示している。

(2) 私についてのある言明「私はFである」は、Fが私*に帰属させられていることを、主語「私」によって表示している。

「ある状態が私*に帰属させられている」という私の信念は語「私」を含まない言明とは異なる行為の理由づけを私に与える。あるいはその信念は語「私」を含まない言明とは異なる行為の理由づけを私に与えるような別の信念を私に抱かせる。

(上で「私*」は語「私」がその指示対象に還元できない自己知を表現していることを示している⁷)

3. 無媒介の把握と指示

前節の最後の分析のうち、(1)は語「私」が外延をもつこと、すなわち語「私」が何ものかを指示することを前提としていた。しかしながら、誤った対象把握の可能性がはじめから排除されているような語「私」の使用では、「語『私』は名前でもなければ、指示をなすことがその論理的役割であるような表現の類でもない」⁸とアンスコムは述べている。彼女は(1)のような見方を拒否しているのである。

アンスコムの議論は難解だが、次のような推論を経て、語「私」は何も指示しないという結論に至ったと思われる。まず、無媒介の把握を表示しているような私につい

⁵ Perry (1979), p. 3.

⁶ 語「私」が主語であるような言明すべてに対して当てはまるわけではない。「私は背が3cm伸びた」という言明では、私は観察や報告に基づいてそのように述べているだろう。この区別については Wittgenstein (1958/2016)に詳しい。

⁷ Castañeda (1966)の表記法を借りた。

⁸ Anscombe (1974/1981), p. 32.

ての言明「私はFである」における語「私」は、指示的なほかの種類 of 語句に置き換えることができないことが確認される。あわせて、そのような私についての発話では、誰がFであるのか、発話者は観察や報告によらず知っているので、対象把握を誤る可能性が発話者にとってはじめから排除されていると確認される。ところで、指示的な語による指示は、その指示を誤る可能性がある。したがって、そのような言明における語「私」は何も指示していない。

アンスコムは語「私」が何も指示しないと考えたからといって、Fであるような私が存在しないと考えたわけではない⁹。また、アンスコムは「私はFである」という言明は、Fであるような人物についての検証ないし反証可能な記述でもあると認めている¹⁰。したがって、アンスコムの主張は、次のような奇妙な考えにならざるをえないように思われる。

(3)「私はFである」という言明は、その言明の発話者SがFであるという事態を意味している。ただし、言明中の主語「私」はSを指示しているのではなく、Fであることの無媒介の把握を表示しているだけである。

思うに、アンスコムの論証は誤っている。というのも、語「私」が指示的だと考えた場合でも、誤った対象把握がありえない理由を説明できるからである。アンスコムに反して「私は立っている」という言明における語「私」はその言明を発話した人物を指示しているとしよう。このとき「私は立っている」が真であるための条件と、「私は立っている」と自己欺瞞的でなく、かつ誠実に私が発話するための必要条件は一致する。発話者Sが立っているとき、そのときにかぎりSは「私は立っている」と誠実に真なる発話をできるのである。

とはいえ、上のアンスコム批判は、無媒介の把握が語「私」の使用にとって本質的である点を批判しているわけではない。やはり、発話者SはS自身の状態の観察や報告によって「私は立っている」と発話するわけではない。アンスコムが指摘した通り、私についての言明は独特な役割をもっているのである。

参考文献

- Anscombe, G. E. M. (1974/1981) “The First Person”, in *The collected philosophical papers of G. E. M. Anscombe Vol. 2: Metaphysics and the philosophy of mind*, Basil Blackwell, 21-36.
- Castañeda, Hector-Neri. (1966) “‘He’: A study in the logic of self-consciousness”, *Ratio*, Vol. 8, 130-157.
- Perry, John. (1975) “The Problem of Essential Indexical”, *Noûs*, Vol. 13, No.1, 3-21.
- Wittgenstein, Ludwig. (1958/2016) TS309: so-called *Blue Book*, ed. The Wittgenstein Archives at the University of Bergen under the direction of Alois Pitchler.

⁹ Ibid., p. 31.

¹⁰ Ibid., p. 35.